

東南アジアにおける仏教の実態

東南アジア仏教圏における中国人の信仰生活とその活動の現況を調査のため、昭和五十四年四月一日より半ケ年間、海外留学の機会をえた。すでに幾度か該地を訪れている関係で、知人友人もおり、かれらの援助をえて、台湾・タイ・マレーシア・シンガポール各国を訪れることができたので、見聞の一端を報告する。

まず順序として台湾仏教からのべよう。台湾における仏教界は、台湾仏教会と中国仏教協会とがあり、寺院はこのいずれかに所屬している。前者は台湾系、後者は大陸系のもので、両者の感情的対立が時には表面化することもあるということである。民国六十四年（昭和五十年）の調査による「台湾省寺廟概況統計表」によると、寺廟の総数は、五、一八三あり、その内訳は、道教四、〇〇七、仏教一、一六一、その他一五である。いまこれらの寺廟の分布を表示すると次の通りである。

高雄	台南	嘉義	屏東	台中	彰化	台北
五三七	五二五	五一〇	四二〇	三四七	三四五	三四二
雲林	宜蘭	苗栗	南投	台南	新竹	澎湖
三三二	三〇〇	二二九	二〇四	二〇三	一五四	一四二
高雄	桃園	基隆	台中	花蓮	台東	
一二七	一〇七	一〇八	一〇五	六五	八一	

このような多教の寺廟は、明末清初に漢民族が、大量に大陸から移住したころより建立されたものであるといわれている。即ち、康熙二十二年（一六八三）七月に、台湾が清国の統治下に入ると、さかんに福建・広東両省からの移民が流れ込み、新たな天地に大陸で行なっていた信仰をそのまま持ち込んだことに始まる。

最初の移民は泉州・漳州からの福建人で、遅れて惠州・湖州からの広東人が移住したという。後から移住した広東人

佐藤達玄

は、先住の福建人に地の利を占められたため、なにかと不利な立場に甘んじなければならなかったことは、想像することのできよう。一般的にみて、移民たちは無知無学の下層農民が多く、かれらはいわば、大陸での生活に行きづまり、新天地に活路を求めた流れ者にすぎなかったと、識者は台湾の歴史を語ってくれた。移民とともに渡来した僧尼・道士の開教師たちによって、今日の台湾宗教の基盤がきづかれたのである。

このような移民のもたらした台湾の宗教や習俗は、当然のことながら、中国南部の文化や伝統を、そのままの姿で移植したものであることは明らかである。たとえば、寺廟の構造や葬送儀礼、料理の方法、便所の設備などは、福建人の文化習俗が濃厚であるといわれ、檳榔実を噛み、裸足で歩く風習は、広東人系に多くみられるといわれていることである。

台湾に行なわれている宗教は、道教・儒教・仏教の三つに大別できるが、人によっては在俗仏教としての竜華教（臨済禅系）——儒仏道三教の教義を混合し、持戒持律の生活を守って菜食主義に徹している——を加えることもある。現に宗教活動を展開している道・儒・仏の三教は、いずれもその本来の面目を失って、たがいに混淆し、さらに民間信仰を巧みに導入して、相互依存の形で布教活動や宗教儀礼を実施しているのである。礼拝像のごときも、主なものをあげると、寺

院では釈迦・阿弥陀・観音が圧倒的に多く、これについて文珠・普賢・薬師・地藏・阿難・迦葉・十八羅漢の順となる。廟では関帝・福德正神・天上聖母・孚佑帝君・玉皇上帝・孔子・神農大帝・瑤池金母・地母娘娘となっている。だが、台湾の仏教は、中国固有の民間信仰である道教と反発することなく、たがいに協調しながら仲よく併存しているため、寺廟がそれぞれ民衆に親しまれ、信仰されており、礼拝像も道仏二教のものが併祀されているのが実態である。

民衆をみても、入口の正面の部屋には祭壇が設けられ、そこには数種の神仏が祀られている。それらは観音菩薩・天上聖母・広沢尊王・司命灶君・福德正神・玉皇上帝・三界公・祖先の位牌などである。ここにあげたものは各戸共通の祭神であるが、この外に出身郷貫により保生大帝・清水祖神・開漳聖王などが祀られている。

また、日本仏教のように、多くの宗派が存在するところでは、日用經典も宗派によって異なるから、他宗の經典を誦誦する機会もなく、声明も多種多様で、他宗の儀礼は全く分らないという不便さがある。ところが台湾の寺院は、禪宗系あるいは浄土系というものの、明確に宗派を形成しているわけではないから、日用經典も「仏門必備誦本」で統一されているから、これが一冊あれば、どこの寺院へ行っても通用するし、また各種の儀礼も全国共通であるし、若い修行僧が覚

えるにも苦を感じない。この点、日本の仏教々団も、殊特な儀礼を除いては、各宗共通のものに統一すべき要があるのではなからうか。台湾における朝暮二時の課誦次第を示すと次の通りである。

(1) 朝時課誦(所要時間は大体一時間半ぐらい)

早期四時に大梵鐘、殿鐘を鳴らして大衆上殿し、排班東西対面し、(1)香讚 (2)大仏頂首楞嚴神呪(咒凡そ四二七句)(3)千手千眼無礙大悲心陀羅尼 (4)十小呪(如意宝輪王陀羅尼・消災吉祥神呪・功德宝山神呪・準提神呪・聖無量寿決定光明王陀羅尼・薬師灌頂真言・観音靈感真言・七仏滅罪真言・往生浄土神呪・善女天呪) (5)般若波羅蜜多心經 (6)回向偈・讚仏偈 (7)念聖号 (8)発願文 (9)三皈依 (10)善女天呪(大吉祥天女呪) (11)韋駄讚 (12)礼祖 (13)讚観音文。

(2) 暮時課誦(二十一時より一時間。单日念阿弥陀経・双日念大懺悔文)

(1)阿弥陀経 (2)往生呪 (3)礼仏大懺悔文 (4)蒙山施食 (5)讚仏偈 (6)念聖号 (7)発願文 (8)警衆偈 (9)拝願 (10)三皈依 (11)大悲呪 (12)伽藍讚。

このほか、珍しいことは、仏菩薩の聖誕祝儀が行われていることで、左のような月日が決められている。

釈迦文仏聖誕祝儀

二月八日、二月十五日
四月八日、十二月八日

東南アジアにおける仏教の実態(佐藤)

阿弥陀仏聖誕祝儀 十一月十七日

弥勒仏聖誕祝儀 正月一日

観世音菩薩聖誕祝儀 二月十九日(出家) 六月十九日(誕生)
九月十九日(成道)

普賢菩薩聖誕祝儀 二月二十一日

文殊菩薩聖誕祝儀 四月四日

大勢至菩薩聖誕祝儀 七月十三日

地藏王菩薩聖誕祝儀 七月三十日

これらの各聖誕祝儀の次第は、(1)香讚 (2)念誦 (3)讚偈 (4)繞念(数百千声) (5)拝願 (6)三皈依の順に行われる。

つぎに寺院経営の仏教学院で代表的な存在として、台湾仏教界に指導的影響力を及ぼしているものに、高雄県大樹郷の仏光山東方仏教学院を無視することはできない。私はこの仏光山主、星雲大師の御好意により、この学院の授業を聴講し、あるいは修行僧たちと起居をともし、中国仏教徒の日常生活を体験する好機に恵まれた。仏光山は今や台湾における屈指の名刹として、台湾名山の一に数えられており、一日数千人に及ぶ参拝客がバスで運ばれてくる。修行中の僧尼は、朝七時より授業に出席し、午後授業終了後は参拝客の接待など多忙な日々を送っている。修行僧、否、生徒たちの通学する「東方仏教学院」のカリキュラムを紹介しよう。

当学院の修業年限は初級(一―二年)、高級(一―二年)の

二段階に分れ、教科目は左の通りである。

初級 一回生……四十二章経・遺教経
二回生……八大人覺経・歎音経普門品

高級 一回生……阿弥陀経・般若心経
二回生……維摩経・金剛経

この「東方仏教学院」の修了者は、さらに「中国仏教研究院」に進むのである。ここは専修部(日本の大学々部に相当)で、修業年限は四年である。四年間に十五学科が開講されるが、その中から八学科を選択履修することになっている。各学科とその履修科目はつぎの通りである。

(一) 仏教日文科開講科目

(1) 日文 (2) 日本文法 (3) 日本仏教史略 (4) 日本仏教各宗概論 (5) 日本経書導読 (6) 日本仏教現況 (7) 日語会話

(二) 阿毘達磨小乘仏教科開講科目

(1) 阿毘達磨思想概論 (2) 阿毘達磨諸大論修及其思想 (3) 俱舍論要義 (4) 毘曇要籍導読 (5) 南伝仏教論典解題

(三) 原始仏教科開講科目

(1) 仏陀以前及仏教的印度与文化 (2) 仏陀及其弟子 (3) 阿含要義 (4) 原始仏教思想概論 (5) 原始仏教之教団大勢及教典結集 (6) 原始仏教聖典導読 (7) 南伝仏教

經典解題

(四) 般若中観科開講科目

(1) 印度般若中観学 (2) 中国三論宗史 (3) 竜樹哲学 (4) 般若系三経 (5) 其他般若中観経論解題 (五) 唯識科開講科目

(1) 唯識学概論 (2) 唯識学史 (3) 唯識要籍解題 (4) 成唯識論大意 (5) 瑜伽師地論選要 (6) 因明学 (六) 法界円覚科開講科目

(1) 法界円覚学概論(参考印順法師妙雲集) (2) 楞伽大義 (3) 起信論大義 (4) 其他要籍導読(法鼓・勝曼等経) (5) 印度正統哲学史(婆羅門教印度教哲学与此系關係較密・故設此課) (6) 涅槃経 (7) 円覚経

(七) 天台科開講科目

(1) 天台宗概論 (2) 天台宗史 (3) 天台要籍導読 (4) 天台止観法門 (5) 天台三大部導読(法華玄義・法華文句・摩訶止観) (6) 法華経

(八) 華嚴科開講科目

(1) 華嚴宗概論 (2) 華嚴宗史(地論宗) (3) 華嚴経選要(四十華嚴・六十華嚴・八十華嚴) (4) 華嚴宗要籍解題 (5) 華嚴宗重要祖師及其思想

(九) 密教科開講科目

(1) 密教概論 (2) 密教史 (3) 西藏宗教及文化 (4) 金

剛頂与大日経導読 (5) 密教要籍導読 (6) 密教修持法
(7) 蔵文入門

(四) 禅学科開講科目

(1) 禅学概論 (2) 禅宗史 (3) 祖師語録 (4) 六祖壇經
(5) 金剛經 (6) 楞伽經 (7) 禅七

(五) 浄土科開講科目

(1) 阿弥陀経要解(無量寿経観経要点) (2) 浄土三経(往生浄土論、世親、往生浄土論註、曇鸞) (3) 列祖語録
(4) 普賢行願品 (5) 大勢至菩薩念仏円通章 (6) 教理
(7) 教史 (8) 浄土詩詞選 (9) 仏七

(六) 仏学文学科開講科目

(1) 文学概論 (2) 中国文学史 (3) 文字学簡介 (4) 声韻学簡介 (5) 訓詁学簡介 (6) 仏教文選 (7) 仏教詩詞
曲選 (8) 中国思想史 (9) 仏教經典文学 (10) 仏教文芸
創作

(七) 仏教音楽科開講科目

(1) 音楽概論 (2) 楽理常識 (3) 理論作曲(和声学対位学)
(4) 梵唄史話 (5) 仏教音楽研究 (6) 歌謡習作
(7) 聖歌合唱 (8) 梵唄教唱 (9) 法会唱念程序 (10) 楽器練習
(11) 仏教舞踏

(八) 仏教芸術科開講科目

(九) 共同科目

(1) 透視学 (2) 素描 (3) 芸術概論 (4) 中西美
絵画組

(1) 書法 (2) 篆刻 (3) 基本画法 (4) 花卉 (5) 山水
(6) 人物画 (7) 図案画

(ハ) 彫塑組

(1) 基本造形 (2) 木雕 (3) 中国彫塑史 (4) 西洋彫塑
史 (5) 塑造 (6) 浮彫

(五) 仏教行政科開講科目

(1) 仏教有関法令 (2) 高僧行誼 (3) 学仏行儀 (4) 布
教法 (5) 寺廟管理 (6) 仏教福祉 (7) 仏教応用文牘
(8) 聖歌梵唄 (9) 法会実習

この専習部四年修了した段階で、僧尼としての基礎知識は完了したことになる。その上で、さらに専門に教師養成機関としての大学院(二ヶ年)が設置されている。

このような「東方仏教学院」「中国仏教研究院」を卒業した者が、日本の大学へ留学するのである。台湾では教育部(文部省)の方針で、仏教系大学がなく、仏教学は一般大学の哲学科の中で講ぜられているため、寺院附属の仏教学院は私的なものとして、学制上では認めていない。日本の学制でも、台湾の仏教学院の修学歴は認めていないので、留学生は止むなく一年生から始めなければならない。したがって、目下、台湾仏教界は、政府に働きかけてこの問題を協議中とのこと

である。ところがアメリカ政府はこの点が寛大で、台湾仏教学院での履習単位を認めているから、それ相当の学年に入学できるので、仏教学院修了者の多くは日本を敬遠して、アメリカの仏教系大学に留学する傾向が増えてきているといわれている。その大学とは、ロスアンゼルスの東方大学と、サンフランシスコの法界大学の二つである。今後、もし台湾政府が仏教学院を公認するようなことがあれば、かれらの海外留学は大幅に減少するであろうが、台湾仏教界でも大学卒業という履歴が、社会に雄飛するための約束手形となっていることは、変りがないようである。

つぎに台湾の寺院名は、名称だけでは寺であるかどうかを判断することが困難であるくらい、多種多様である。堂（慧日講堂）、会（台北仏教会）、宮（双福宮）、殿（扶北殿）、林（仏教居士林）、庵（蓮池庵）、巖（円通巖）、苑（浄華禅苑）、舎（蓮宗精舎）、台（万妙度生台）、処（東山菩薩学処）、館（仏教図書館）、岩（永福岩）、蘭若（同浄蘭若）というように、「寺」という呼称にこだわらず、名称によってその寺の性格というか、住持の布教活動の目標が設定されているように、民衆とのふれ合いの場としての役割を積極的に提示しているようで、親しみを感じる。寺院形態が雑多であることは住持の後継者を選定する場合をみても、うるさい法的な拘束はないようである。住持選定はつぎの五つのケースに分かれ

ている。

- (1) 住持、管理人の遺囑指定によるもの、あるいは遺言によるもの。
- (2) 住持の子供が継承するもの。
- (3) 信徒の推挙によるもの。
- (4) 董事会推薦により、衆僧同意するもの。
- (5) 現住持が徒弟中より、経営能力のあるものを選出するもの。

このように、寺それぞれの方法によって後継者が決定される方式は、日本の各宗派における資格重視の在り方に比べると、全く自由なものを感じる。その上、僧尼になるための資格取得についても、本山に安居しなければならぬとか、学歴や経歴によって僧階をつけるといふようなこともなく、道心の有無を重視する仏教本来の在り方を堅持することに努めているということである。わが宗門も大いに参考とすべきではなからうか。

然し台湾仏教界においても一つの悩みがある。それは道心の問題である。若者は兵役を契機として、仏門から遠ざかるという傾向が現われ、後継者難に陥っている。したがってその空白を埋めるために女性の進出が目立ち、台湾仏教界の大勢は尼僧の活躍の場になりつつある。出家者の八〇パーセント以上が尼僧であるという事実が、このことを実証してい

る。

つぎに、台湾仏教界の山人（高砂族）に対する布教活動の欠如を指摘したい。苗栗や潮州を始めとする山人居住地区へは、平地人（一般住民をこう呼んでいる）の立入りが禁じられており、警察の許可がなければ山人部落を訪れることはできない。役所の人と同道しても入れない部落もあった。

台湾政府は蕃人たちが共産主義者になることを恐れ、外部との交渉を禁じながらも、一面では特別保護地域として、住宅施設の改善、環境の整備、教育の普及に努め、山地の奥深くまで近代化の波は押しよせている。かれらの住宅は、時には平地人以上に立派なものがあり、テレビ、冷蔵庫、自動車、電話ありで、かつての蕃人というイメージは全くない。かれらは上手な日本語を話し、日本人と知るや、なつかしげに話しかけてくる。戦時中、日本軍人としての高砂族の武勇は有名で、多くの戦死者を出している。

戦後の物資欠乏と食糧難であえいでいたころ、いち早く布教の手をさしのべたのは天主教であり、仏教徒は無関心であったということである。天主教の宣教師たちは、布教の手段として、山人に食糧やその他の生活必需品を配給して、かれらを信仰の世界へと導いたのであった。だが生活の援助はしたものの、かれらの心の中まで食い入ることはできなかったようである。山人たちは配給物資が欲したために、教会へ

足を運んだのみであると語っていた。それゆえ教会における祈りでも、十字を切る場合に、口の中で「生地・うどん粉・あめ玉・玉子」といいながら、手を動かすのみであったと往時の模様を語ってくれた。

しかし今日では、天主教の愛の手も絶たれたし、台湾政府の保護もあって、衣食住の心配がないため、日曜日に教会へ行く者はなく、天主教信仰は過去のものとして消え去っている。ただ教会のみが寂しく建っているのみで、葬送儀礼はかれら独自の風習に従って行われており、土俗信仰の世界に生きていたのである。純朴なかれらに、今こそ仏教の布教が必要であるし、かれらも天主教よりか仏教の方が好いと言っていた。

台湾人の精神構造は、なんといっても道教と仏教が底流をなし、それに仏教の三世因果、輪廻転生の思想が加味された複雑多岐な要素をもっている。僧尼たちも、自分自身は坐禅し、禅的なものを優先させているが、信徒に向っては阿弥陀信仰を説くという、二重構造の世界に生きている。私を案内してくれた駒大卒の呉振声法師も、信者との挨拶は「オーミート」というのみで、信者も「オーミート」と挨拶する。阿弥陀信仰が日常の挨拶の中に生きているのである。

だが時代の流れは、どの国でも急速に若い世代の意識が主流をなしつつある。孝の観念も次第に薄らぎ、祖先崇拜の

心情は、核家族化に伴って消えつつあると、老人たちはなげいている。

つぎにマレーシアのボルネオ、サワラ(Sarawak)州における中国仏教の現状をのべよう。赤道に近い常夏の地、機上からみると、見渡す限りジャングルが展開し、サワラ州の州都クチン(Kuching)が大森林の中に口を開いたように見える。空港より二十分ほど車に乗ると、日本の技術者によって建設された西欧風の明るい、モダンな都市が眼に映る。各種の政府機関や綜合庁舎、博物館、学校、病院などを始め、南国的な建物が緑の中に美しく点在しているさまは、日本では見られない。

東南アジア仏教圏は、どこの都市へ行っても華僑の活躍が目立っている。行政を除くすべての経済活動は、華僑によって独占されており、現地の住民は奥地へと追いやられて、ささやかな農耕生活を営なみ、中国人との交流は必需品の購入以外にはみられない。クチン市の経済活動も華僑の勢力下にあるため、そこで行われている宗教も、当然のこと、道仏二教が中心をなしている。

クチン市の宗教団体は、(1)純粹の仏教、(2)道仏混淆の天仙教、(3)仏教・回教・天主教等からなる徳教会の三つに大別することができる。まず、仏教集団は、浄土系の砂勝越仏教会、古晋居士林、仏教修禪教経学会、砂泰仏教会、大覚林仏教会、

慈雲正信仏教会の六ヶ寺と、最近チベットよりきた釈迦張師によって、東密系の金剛乗精舎を加えた七ヶ寺によって形成され、信徒は四、五千人ぐらいいるといわれている。なかでも砂勝越仏教会は、駒大卒の林達能法師が建立した堂々たる大寺院であるのに対し、その他のものはビルの一室を借りたもの、あるいは住宅街に民家と並んで建てられた小さな草庵的なものであった。しかし、この七ヶ寺の布教活動は、青少年男女の熱心な信仰と教理研究が中心であり、どの寺でも行事予定が黒板に書かれ、仏典の講読会に使用されるテキスト類、経典などが山積されていて、教理研究が盛んに行われていた。

私を案内してくれた青年は、仏教修禪教経学会のメンバーで、流暢な英語を話し、日本仏教に強い関心をもっており、日本仏教史の理解も仲々深かった。この学会は主事・副主事・英文秘書・財政とそれぞれ転務を分担し、在家信者によって運営されていた。宗教活動の中心は、朝晩の読経礼拝と僧侶の法話である。

道仏混淆の天仙教は十ヶ寺ほどあり、中国人の大多数はこの信者である。台湾でみた通俗仏教と同一のものである。また徳教界は、一般大衆への慈善活動に奉仕することを主目的としているが、三者とも特色ある宗教活動によって、民衆の精神生活を支えている。

なお、右の三宗団のほかに、山地住民の宗教は台湾と同じく天主教であるが、ここでの天主教の活動は無視できないものがある。かれらは住民を対象とした学校・病院を経営して地道な布教を行っている。山地人の生活にふれたいと思い、車で山中深く入ること三十分、ようやく部落に着く。竹で造った家「Long House」がこの地の観光名所になっていた。幾世帯もが共同生活をして、昔ながらの面影を残しているというのである。酋長の家に案内された。戦時中、日本の兵士から教わったといつて上手な日本語を話したのは驚いた。部落の長として情操ゆたかな好紳士であった。テレビ、冷蔵庫まで備えた文化生活で、山地の都市化が急速に進んでいることを知った。

クチン市より快速艇に乗り、ジャングルの中を縫うように濁流がうずまく大河（水深二十メートル）を遡航すること六時間、巨大な流木が船に激突する不気味な音に緊張しながら、サワラ州第二の都市シブ（Sibu）に到着した。人口十万。仏教寺院は市内に二ヶ寺、郊外に一ヶ寺ある。私は市内の一ヶ寺、即ち製材会社の社長が自宅の半分を開放して設立した詩巫仏教会に足を留めた。三尊仏を祀り荘厳用の仏具も一応整っていた。社長の居間には先祖の位牌を祀った仏壇があり、家族全員が毎日読経することである。信仰深い一家である。翌日の新聞「馬來西亜日報」に私の訪問が報道され、

青年会の要望で「なぜ仏を拝むか」というテーマのもとに、仏教講演会を開催することになった。会場に集まった老若男女約百名、全員同音に観音経を読誦したのち講演を始めた。夜七時から約一時間、真剣に聞こうとする聴衆の眼は輝いていた。終了後の懇親会で、かれらの仏教的教養の深さには驚かされた。こんなボルネオの山奥で、仏教の話をする因縁を結ぶとは夢にも思わなかった。ただ仏教徒であるという共通の意識が、人種的へだたりと、言語的障害を取り除いてくれ、楽しい団欒の一夜を過ごすことができた。

詩巫仏教会の行事は、毎週四回（日曜の朝と、火土土の夜）信徒全員が集まって読経することと、毎月一日・十五日に僧侶を導師として読経・法話を聞き坐禅を行なうことになっている。かれらの熱心な仏教行事への参加は、日本人など足許にも及ばないものがある。

サワラ州にあつては、一九七九年より釈尊の降誕を記念して、四月八日が休日になったが、それはシブ仏教徒の政府への要望が実現したのであると、かれらは誇らしげに語った。だが、このことは信教の自由を認めているマレーシアでは、各宗教の開祖の降誕日は平等に休日とする政治的配慮によるものであつて、ただその実現がかれらの働きかけによって早められたことは事実のようである。

このほか、仏教徒の社会福祉活動は、孤児院・老人ホーム・

盲人收容所の経営にまで進出し、収支は公開する制度をとっている。仏教徒のこうした奉仕活動に医者も協力し「医は仁術なり」で、困窮者には無料で診察している事実は、大乗的慈悲の精神が浸透していることを物語っている。

シブを後に、さらに奥地の仏教事情を探ろうと、再び恐怖の快速艇に乗り、一路カピ(Kapit)へと遡航した。乗客の大半は色黒の現地人ばかりである。空腹に耐えかねて現地人が常食としている粽を買って食べた。粽がとりもつ縁で、かれらと親しくなり、下手なマレー語で日本から来たことを告げ、話がはずんだ。奥地に進むにつれて流れも早になり、流木も数を増してきた。兩岸には果くないジャングルが続く。過日、日本の木材業者がこの河に落ちて行方不明になり、魚の餌食になってしまったのであろうと彼等は説明した。この河には大魚が沢山いるそうである。乗ること六時間にして、ようやくカピに着いた。小じんまりした町である。ここには道教の数々な廟が一つあるのみよ、寺は見当らない。

私を出迎えてくれた米穀商の主人は、この地の必力な仏教信者で、この町が中国仏教展開の最前線で、これ以上奥地へ行っても仏教徒はいないということである。かれはこの地に寺院建立を計画中で、仏教精神に基づいた諸行事を積極的に展開しようと、種々夢をえがいていた。

かれの言によりカピを最後に、ボルネオよりマレーシア仏

教の根拠地ペナン(Penang)島へと向った。ペナン島の華僑は福建省出身者が多く、その他はインド人・マレーシア人・ヨーロッパ人等が雑居する国際都市でもある。空港に近い田畠の中には、日本軍が築いた無数のトーチカが点在し、戦争の傷跡をさらけ出していた。この島には仏教寺院が大小併せて五十ヶ寺もあるが、その代表が極楽寺である。前述の林法師が監院である。この極楽寺は一八九〇年に建てられたマレーシア最大の寺院で、ペナン・ヒルの麓にある。緑の木立の中に、黄色とピンクに塗り分けられた七層の塔(高さ一〇〇フィート)に上ると、ペナンの町並みが眼下に展開する。三〇エーカーもある広大な境内には、御影石が敷きつめられ、堂々たる大伽藍が処狭しと建ち並ぶ偉容は、まさしく総本山の貫禄十分である。この極楽寺より派遣された僧尼が、タイ・マレーシア・シンガポール・インドネシアの各地に居住する華僑世界で活躍しているとのことである。

ペナンには、イスラーム教のモスク(Mosque)、ブルマ寺・ローマカトリック教会・中国寺院ありで、宗教や民俗研究の宝庫である。ここでも新聞に報道され、ペナン仏教協会が「仏教における信と行」について記念講演を要望された。聴衆の一人が「本門と迹門」について質問してきた。聞けばその人は創価学会の信者で、学会発行の諸雑誌をカバンから出してみせた。夜遅くまでホテルの一室で語り合ったが、ペナ

ンには多くの学会員がいて、対論会を活発に行っているとのことである。

つぎにタイ国では、バンコックの郊外の田園地区に建てられた大伽藍「仏光学苑」に投宿した。この寺は、林法師が淨財を集めて建立した寺であるというが、その結構は実に雄大華麗そのものである。小乗仏教の牙城タイ国へ、大乘仏教が進出することは、まさに敵陣に切り込む悲壮な覚悟を要したことであろうと思つたが、実はさにあらずである。タイ国經濟の実権を握っているのは華僑であるし、タイ国人口の半数近くは中国人である関係上、かれらの信仰の基盤は中国仏教であり、生活と切り離すことのできないほど密着している。

バンコックへ進出した僧尼の殆んどが台湾出身者であるから、仏教の法要儀式から常用經典に至るまで、すべてが台湾仏教の延長といつてもよい。中国系仏教寺院はかなり沢山あると聞いたが、実数は定かでない。私は大小乗を信奉する僧侶の出会いはどうであろうかと関心をもっていた。かれらは路上で出会つても、互に挨拶もせず、無関心そのもので、他人の世界に入り込もうとはしないようだ。バンコックにある小乗の寺では、寺の運営上、建物の一部を葬儀所として開放しているが、それを使用するものの多くは華僑であるという。私が見た二組の葬儀は、台湾のような道仏混淆の儀礼であり、タイ国人たちは無関心でみようともしない。タイ国に

は大小乗の仏教が併存しているが、信仰や儀礼の点で制約を受けるようなことはないということである。

一日、バンコック市内のタイ国系寺院である Wat Srakesa Rajavaramahavihara を訪れ、長老 Phra Bhromagunabhorn 比丘にお会いする機会をえた。長老はパーリ語の授業中であつたが、遠来の客として迎えてくれた。板の間の、開放された部屋で、十四・五名の比丘たちが坐ったまま、机も使用せずに、長老の回りに円陣を造つて文法書を読んでた。質素な教場、これが伝統的な授業の在り方だと説明してくれた。長老は駒大でのパーリ語教育・仏教学の講義内容について、非常な関心を持っていた。

郊外の寺院に参詣した折のことである。境内に遊んでいた子供が、私に向つて合掌し、いきなり「*Namo tassa Bhagavato Arahato sammāsambuddhassa*」と、つて、手を差し出して去ろうとしない。観光客目当てに小使錢をねだる子供の一人であつたのである。それにしても、パーリ語を口ずさむところは、さすが門前の小僧である。

つぎにシンガポール仏教の現状にふれよう。この地に仏教が伝播したのは、百余年前のことであり、華僑の進出発展が、仏教の布教伝道を容易なものにした。爾来、転道・転岸和尚を始め、太虚大師の巡錫等、名だたる十三名の諸大徳の絶ゆまざる活動によつて、今日のシンガポール仏教は築かれ

たのである。

この地の仏教も道仏混淆の仏教であり、前述の各地のものと異なるところはない。あの小さな島国に二十六もの代表的寺院が教田の開拓に努めているし、これと併行して、靈峰菩提学院・仏学研究所・中華仏教義学・菩提学校・弥陀学校・新加坡女子仏学院等の教育機関を設けて、青少年に仏教々理や情操教育を施し、多くの卒業生を社会に送り出している。

また出版活動として、覚華・獅声・覚灯・中国仏学・人間仏教・南洋仏教等の週刊・月刊の仏教誌を発明し、仏教文化の普及に貢献していることは周知のことであろう。前述の二十六ヶ寺中の福海禅院は、駒大卒の釈空雲尼が住持する寺であるし、林達能法師と共に、東南アジアにおける本学卒業生の活躍は恬目すべきものがある。

上述したように、東南アジア仏教圏は、どこまで行っても華僑の世界であり、仏教が生活の一部として、かれらに希望と光明とを与えているのを随処でみる事ができた。たとえば彼等の信仰する仏教が、思想的に爽雜物を含んでいても、仏教の基本的すがたをすっかり擱んでいることは否定できない。かれらは謙虚に、自己に忠実な生き方をしようと努めている。若い青年たちと会食する機会が多かったが、その都度「自分は仏教徒ですから、飲酒・肉食はしません」というのであった。半年間、彼等と生活をともにして、仏教徒の生活

はどうあるべきかを、しみじみと味う機会に恵まれたことに感謝する。